

導入レクチャー資料

ねらい：大学の評価に関する基本的な考え方、発想法を体感する

大学の評価におけるスキルは種々あるが、最も重要なのは基本的な考え方、発想をしっかり持つこと。それが無いと、スキルを使いこなせないばかりか、評価作業が場当たりのになる（評価自体が目的化し、評価疲れを招くことになる）。

1. 大学評価とは

大学を誰が何のために評価し、その結果をどのように教育研究等の水準の維持・向上に結びつけるかという問題を考えるうえで、評価の目的や意義を理解することが重要である。

大学に関係する様々な「評価」として、例えば、学生による授業評価、研究プロジェクトなどの開発評価、教職員の人事評価、大学あるいは学部等の組織が自ら行う評価、設置認可や認証評価等の外部者による評価、大学ランキング、世間からの評判等を挙げることができる。

一方、社会的組織としての大学は、大学の教育研究水準の向上を図るため、以下の取組を自律的に行っていくことが必要である。

- 大学は、社会的な使命を自覚し、その存在理由や大学の状況を確認、社会に説明する。
- 大学は、自らが掲げる理念・目的の実現に向けて、諸活動の質の維持・向上を図るための改善活動を行う。

これらの取組を進めるうえで、大学の評価（以下、「大学評価」という。）は、主に以下の目的に基づいて行われており、その目的を達成するために重要な役割を果たす。

- **説明責任 (accountability)**
大学の教育研究活動等の目的や特徴、成果を示し、社会的説明責任を果たすこと。
- **改善 (improvement)**
大学における諸活動の現状理解を通じて、問題点や課題を改善し、大学の質の保証ならびにその維持・向上を図ること。

図1に示すように、大学評価の中核にあるのは、大学（あるいは学部等）自らがその結果をもって教育研究等を改善しようとする「自己点検・評価」である。また、大学評価導入の経緯については、表1に示すとおりである。

現在、日本では、学外の第三者組織による大学評価や政府機関による主な大学評価として、第三者組織による認証評価、政府機関による国立大学法人評価がある。表2に示すよ

うに、認証評価や国立大学法人評価も、この「自己点検・評価」を基にして実施されることから、各大学には、様々な評価活動のなかでも、まず、各大学の教育研究の改善のために、自ら評価活動を行うことが期待されているといえる。

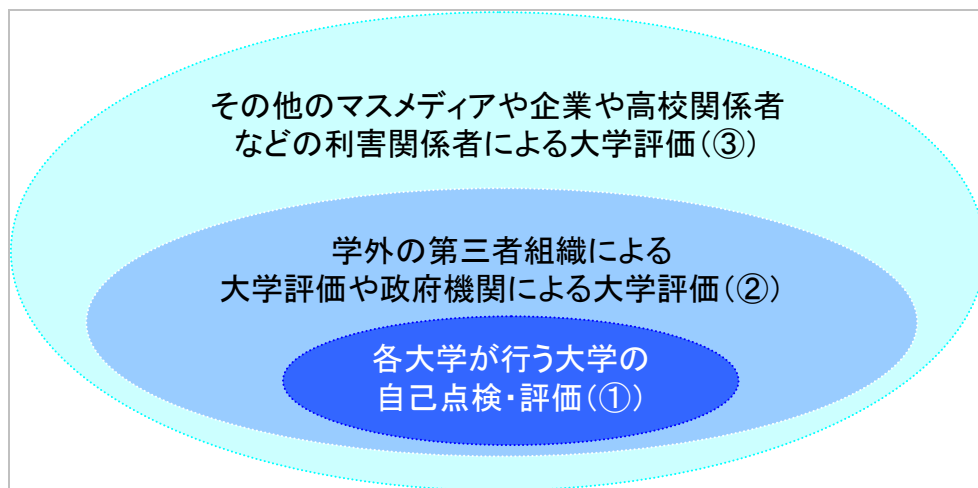


図1 大学評価の基本的な構造 (出典:「日本における大学評価の進展」より作成)

表1 大学評価導入の経緯

項目	概要
大学設置基準の大綱化 (1991年)	「事前規制方式」を緩和する代わりに、「自己点検・評価」の努力義務化
大学設置基準の改正 (1999年)	自己点検・評価の実施と公表の義務化、自己点検・評価の外部者による検証の努力義務化
認証評価制度、国立大学法人評価制度の開始 (2004年)	大学の自己点検・評価に基づく第三者による評価の義務化

表2 機関別認証評価と国立大学法人評価の概要

評価制度	機関別認証評価	国立大学法人評価
基礎となる法律	学校教育法	国立大学法人法
評価の対象	全ての大学、短期大学、高等専門学校	国立大学法人、大学共同利用機関法人
評価の目的	教育研究活動などの、①質の保証、②質の改善・向上、③社会的説明責任	①中期目標期間における諸活動の質の向上、②次期中期目標・中期計画への反映、③国費の投入に対する説明責任
評価内容	認証評価機関が定める評価基準に基づき、教育研究、組織運営及び施設設備の総合的な状況	中期目標、中期計画及び年度計画に対する教育研究活動や経営面などを含めた総合的な達成状況
実施時期	7年以内ごと	各年度終了時及び中期目標期間終了時

2. 評価担当者が評価業務を行うに当たって、最も意識しておきたい理念

- (1) 支援的であること：査定ではなく、質の維持向上のための手がかりを提供＝改善志向
 - 上記のように、評価には説明責任（accountability）と改善（improvement）の2つの目的がある
- (2) 非排除・双方向的であること：関係部局の教職員等との密な対話と信頼構築
 - 目的を共有する
 - 教職員とのコミュニケーションにおいて教育研究等の状況を把握し信頼関係を構築する
- (3) 明示的であること：作文ではなく根拠に基づいた評価とプロセスの透明化
 - 改善を指向するためには誠実な自己点検・評価が必要
 - 現状を把握し共有するために多様なデータに基づいた活動の根拠を示す

3. 大学評価の観点：実際の実行を様々な角度から評価するのに必要な観点

- 「目的・目標－計画－実行－評価－改善」という一連の流れを踏まえ、点検・評価項目（評価の観点）を明確にする。

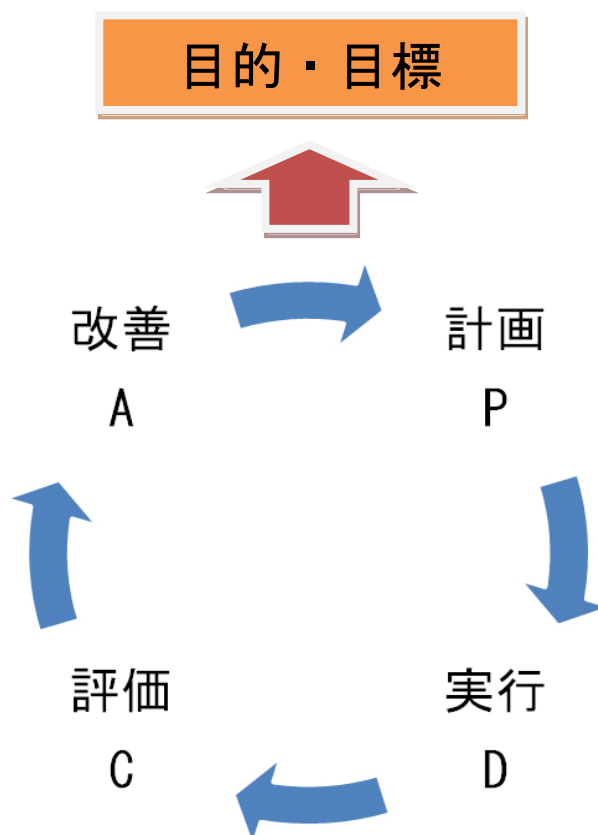


図2 「目的・目標－計画－実行－評価－改善」の構造

○ 目的や目標に対し、次の観点から取組の現状を把握し点検する。

- プロセス：成果の達成につながるプロセスの中に位置づけられる活動や取組
- インプット：諸活動を実施するために必要な組織編成及び人的・物的資源などの投入
- アウトプット：インプットによってもたらされるものの規模や頻度
- アウトカム：諸活動の発展・充実に役立つ目標の達成状況を示す結果（成果、効果）

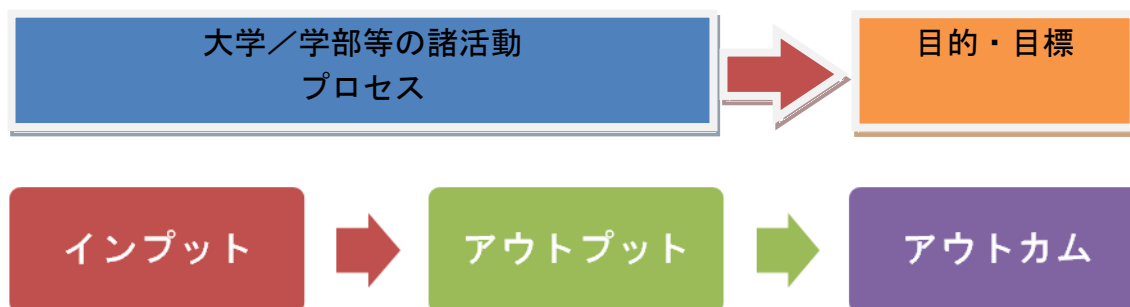


図3 目的・目標と各観点の関係

4. 評価書を作成する／読む上でのチェックポイント

- (1) 計画や目標に対して、記述・表現が明確か？
- (2) 計画や目標の説明について、具体性があるか？
- (3) 計画や目標に対して、データは適切に使われているか？
- (4) 評価の基準や観点の捉え方、取組の計画そのものについて、問題はないか？

本日の作業：

以上の(1)～(3)を踏まえて実例を吟味し、その結果を発表して、より良い評価書作成の勘所をつかむ。

ただし、(4)について、本日の作業では対象外とする。

※ 本資料に出てくる単語等については、資料1-2「大学評価関連用語集」を参照してください。

■参考文献

江原武一：「日本における大学評価の進展」, 立命館高等教育研究第9号, 2009年, pp.93-108.